

# 学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



## 子どもに寄り添う“教育のプロ”

子ども教育学部 佐伯 陽

ここ 20 数年の学校教育界を取り巻く状況は、教育の目的論から教育方法・教育内容論、また学校長の権限の確立をはじめとし職員会議の位置づけを含めた組織論にいたる大きな波がうねり続けている。特に近年の学校現場では、いじめから生起する子どもの命にかかわる大きな問題がある。

私が県教育委員会の指導主事を拝命した当時は、小中学校では不登校や問題行動、高等学校では中途退学が生徒指導の中心にあった。公立学校の校長時代には、教員の不祥事防止を含めた組織マネジメントという経営が求められた。また、近年はモンスターペアレントへの対応のために市町教育委に弁護士を配置するところまで出ている。

上記の問題の要因や背景にあることは、教員の質や保護者や社会の価値観の変化など多くのものがあるが、学校教育というのは、子どもを対象とすることは時代が変わっても変わらない。社会問題などについては専門ではないので言葉を挟まないが、教育界で働き、今の私の教員養成という立場からすると、教育界の問題解決に“教育のプロ”としての教師の力を求めたい。

教師には、2つの専門性を求めたいと考えている。1つは、教科の専門性（知性）であり、もう1つは人としての専門性（感性）である。数学嫌いの先生に算数を教えられると子どもには算数の力が育たない。小学校の先生は中高の先生と違い、広く浅い教科の力に加えて、得意なジャンルを1つはもって欲しい。2つめの具体は、子どもの痛みがわかる教師である。算数がわからない子どもの気持ち、集団になじめないで苦しんでいる子どもの気持ち、その子たちの気持ちを受けとめ、その子たちの存在を明るくものにする教育を展開する教師を求めたい。子どもや保護者が求め、待っている先生はそんな先生ではないだろうか。

私は、小・中・高・大・院と良い先生に出会い、救われ、育てていただいた。教師になったときは、そんな先生の物まねをし、嫌だった教師を反面教師としてチョークを持ったつもりである。（自己満足？）「忙しいから学級通信を書く暇はない」という現場の教師の声を時として聞く。その理由は本末転倒であり、“プロの教師”としての資質を疑ってしまう。逆に、子どものために日々汗を流している先生を見るとうれしくなり、体に気をつけてと声をかけたくなるのは私だけだろうか。

先日、生徒指導をテーマにした社会教育のあるシンポジウムでパネラーを務めた。その中で、「近頃の学校は・・・」「近頃の先生は・・・」とお叱りを受けた。指導の間違いをする1つの学校、不祥事を犯す1人の教師によって正しい教育を実践している多くの学校や教師の評価が、“近頃の・・・”“私の子どもの通った・・・”で流されてしまう。その方のご存知の学校は私が勤めた学校ではないが、本当に申し訳ない気持ちになり、教育は本当にむつかしいとも考えてしまった。

私は教員をめざす人には、たくさんの経験を積んで欲しいと思う。アルバイト先で学校では出会うことのない人と出会い、部活で同じ釜の飯を食べる仲間と出会い、人とのつながりを体験する。また、生徒会などの組織で人のお世話をし、行事を遂行することの難しさを体験する。学校というところは、日々そのような活動を指導することが多いので、その体験は生きてくる。

加えて、教職をめざす大学生になったときは、しっかりと教育論議をして欲しい。何故教員になるのか、どんな教員になるのか、どんな教育をしたいのかなど、教育の本質に迫る論議を仲間として欲しいと思う。それが、子どもが好きで教師になりたいという恣意的な思いから、子どもたちや保護者が待つ教師像に大きく近づけてくれると思います。